

## 入選

### ぼくがもらった3つの親切

福岡県 二島小学校

五年 大山 寛太

ぼくに起こった大事件。大切にしているサッカーボールを、6年生がなくなしてしまった。

「寛太、ごめん。」

一つ年上の6年生が、申しわけなさそうにあやまってくる。いつものことだから、きっと見つかるだろうと、ぼくはそう思いながらいっしょに探しに行く。草が生いしげっていて、探しても探してもボールは見つからない。実はそのボールは、明日の試合で必要なボール、ぼくにとっては大ピンチ。汗だくになってボールを探してくれている6年生を見ると、「もういいよ。」と言ってしまった。

試合では、友だちのボールを使用したのでなんとかクリア。それでもなくなったボールのことが、気になっていた。その気持ちは6年生も同じだったようで、担任の先生にも本当のことを話して、放課後一生けん命に探してくれていた。

6年生は正直に、自分たちの失敗を先生に話していた。とっても困っているはずなのに、なぜかとてもうれしい気持ちになっている自分がいた。

ぼくは、ボールのことは少しずつあきらめかけていた。たしかに6年生のやったことは悲しいことだけれど、あんなに一生けん命に探してくれていたから、責めることはできない。それで、今度はぼくの担任の先生に、このことを相談した。先生は、

「大事なボールやったんよね。おうちの人に買ってもらったボール、それであきらめてしまって、いいかな。」

ぼくの思いを受けとめてくれて、これからどうしていくか、いっしょに考えてくれた。公園のあき地だから、だれか通りがかりの人が見つけてくれるかもしれない。そのときのためにかんばんを作ることをしてい案してくれた。

『もし、サッカーボールを見つけたら、ここにとどけてください』

と書いて、ぼくの名前と家までの地図も書き、学校からの帰り道の五ヶ所にはってみた。

かんばんを作ってから約2週間後、家のインターホンが鳴った。げんかんを出ると、そこには高校生くらいのお兄ちゃんがふたり立っていた。手にはサッカーボールをもっている。ぼくの顔を見ると、

「サッカーがんばれよ。」

と言って、ぼくのサッカーボールをさし出してくれた。もうぼくは、うれしくてうれしくて、逆にお礼の言葉がでなかった。お母さんは感動してなみだをうかべていた。あわてて、

「ボールが見つかってうれしいです。ありがとうございます。」

そう言うと、ぼくも泣きそうになった。

あきらめていたぼくのボールが今、目の前にある。たくさんの人の協力や、アイデアのおかげだ。ぼく一人の力では、決してもどってくることはなかった。今ぼくは、見つかったことを報告する感謝のかんばんを作っている。協力してくれた全ての人に感謝を伝えるために。